

「考える」「わかる」「できる」を体験する 就学前指導
—日本語指導者としての思い「学びに向かう力」を育てる—

坪井 牧子 (大垣市プレスクール)

1. プレスクール「きらきら教室」の特徴

プレススクール「きらきら教室」は、2012 年、大垣市と大垣国際交流協会の協働事業として開設。対象は、市内の幼稚園・保育園・こども園に在籍する外国ルーツの 5 歳児とその保護者である。発表者はその準備段階から現在まで日本語指導員として携わっている。

「きらきら教室」では、指導員が園を訪問する巡回指導 (1~2 週間に 1 回：園児対象) と拠点園で行う集団指導 (全 5 回：親子対象) を並行して実施¹⁾ する。語彙調査²⁾ 結果、園の聞き取り、調査票 (成育歴、言語環境) をもとに指導回数を決定し、カリキュラムを作成している。

12 年間の修了生は 390 名を超えた。本発表は、2021 年~2023 年の 3 年間に発表者が指導した計 25 名の指導記録に基づいて報告する。

表 対象児 (2021~2023) 25 名の概要

| | |
|------------------|---|
| ルーツ | ブラジル、中国、フィリピン、インドネシア、ネパール、韓国、ボリビア、日本 |
| 出生地 | 日本生まれ 18 名 / 外国生まれ 7 名 |
| 滞日年数 | 5 年 19 名 / 4 年 1 名 / 2 年 3 名 / 1 年 1 名 / 5 か月 1 名 |
| 入園年齢 | 0 歳~3 歳未満 11 名 / 3 歳児~7 名 / 4 歳児~3 名 / 5 歳児~4 名 |
| カリキュラム グループ分け | ① ひらがな既習 (12 回) : 3 名 ② ひらがな未習+語彙理解あり (17 回) : 9 名 ③ ひらがな未習+語彙数少ない (21 回) : 10 名 ④ 支援 (17 回) : 3 名 |

2. 実践の目標

プレススクール (就学前指導) には、次の 2 つの目標が必要だと考え設定した。

- ① 「言葉を増やす」「ひらがなや数の理解」など「日本語」の「知識 (認知能力)」を高める。
- ② ①の土台となる「考える」「わかる」「できる」経験、「学びに向かう姿勢や力」を育てる。

目標①は、入学前「準備」として周知されている。1~2 週間に 1 回程度の巡回指導でどのくらいの成果が期待できるのか予想がつかなかったが、行政の事業として客観的成果 (数字) が求められている。目標②は、発表者が 15 年以上前に出会った小学 1 年生の指導経験から設定した。子どもたちは日本語が十分でないが支援はない、教室にいても授業に参加できないために「わかる」「できる」「たのしい」経験ができない。こうした子どもに、小学校入学前に「目標をもって頑張ること」を体験させ、「自分で学ぼうとする力」を育てたいという「思い」からである。

3. 具体的な実践の内容とその過程

目標①については、「きらきら教室」では、事前 (6 月) と事後 (2 月) に語彙調査を実施、4 ヶ月間の学びの成果を出している。その過程として、語彙調査の基本的な語彙と小学 1 年生の教科書を検討し語彙と学習内容をプレススクールのカリキュラム内容に反映させている。

目標①と②に共通して、子どもだけでなく、保護者の協力も得て下記の実践を行っている。

- ・巡回指導：言葉や文字・数を学ぶ → 宿題 (保護者の見届け)、応用 (絵本、歌、反対語カード、「がんばり」シールなど) → スモールステップ、スパイラル学習の経験「わかる」
- ・巡回指導時：個別での学びの積み重ね → 集団指導時：みんなで勉強するときに「わかる」

「知っている」「たのしい」の経験。

- ・語彙調査結果から：「言葉」への気づき➡知らない言葉、幼児語(ワンちゃん、おてて)、形容詞の使い分け(でかい)、教え方(助数詞)、構音の誤りなど、指導員とともに「5 歳児のことば」に向きあう。「考える」「わかる」の経験。
- ・天気、日付・曜日、時間など：毎日の事象に関心を持ち、自分の「目」で見て観察し「考え」、指導員との「対話」で確認し合う。

4. 目標の達成度

25 名の園児の成育歴、日本語の力、発達等が多様であり、プレスクールでの学習効果については、数値化や一般化は馴染まないため、目標の達成度は具体的な事例で捉える。

語彙調査結果、24 名(1 名欠席)の結果は、事前語彙調査 100 問中 0~93 であったが、事後調査では 14~100、1 人当たり +7~78 の効果が見られた。理解語彙が増え、相応しいことばや答え方、正しい発音が「できる」ようになり、自信をもって話せるようになった事が確認できた。

園児 A(4 歳 8 か月来日、4 歳 11 か月入園) 事前調査では 7/100 問。他は英語に似た音や擬声語で表現して回答。21 回の指導を経て 85/100 問。日本語の語彙が増え、文字の読みや数の理解が「でき」、ひらがなシールをもらうために「頑張り」、いつも「楽しみ」にして教室に参加。保護者も宿題確認や集団指導への参加など協力的だった。修了時、構音の誤りがあり、単語レベルの会話ではあったが、親子で日本語の力を理解し、向き合ったことがプラスの効果になったと感じた。また、自ら発話し、相手の目を見て話す態度が身についた。

園児 B(日本生、2 歳児入園) 家庭は母語だけの環境。日本語の言葉はある程度理解していたが、使い分けや違い(お手洗い/手を洗う)の理解が出来ていなかった。落ち着きのない態度がみられ園での評価が低かった。母語語彙調査を実施し、表情豊かに自信をもって話している様子を確認。「対話」を通した巡回指導で日本語も自信をもって話せるようになった。指導を通して、本人に対してだけではなく、プレスクールに対する園の理解や評価も深まった。

5. 今後の課題

事例にみられるようにプレスクールや巡回指導は、就学前の知識の「準備」だけでなく、学びに向かう姿勢や力(非認知能力)の「土台」作りとして必要だと強く実感している。しかしながら、巡回指導を実施するにあたっては、園の理解や日程調整等、市役所や協会の担当職員に負担が多い現実がある。また、成育歴、日本語の力、発達等が多様である「5 歳の子ども」を理解し、指導に向き合う指導員の人材育成も課題の 1 つである。

注)

1) 坪井牧子、桐山知弘(2022 年)「実践!プレスクール 10 年、これまでの取り組み—行政の区切りや様々な立場をこえて『つながる』学習と支援をめざして—」子どもの日本語教育研究会 第 7 回大会実践発表

2) 愛知県(2009 年)「プレスクール実施マニュアル」資料集 2. 語彙調査 p84~98

【参考文献及び資料】

小塩真司編著(2021)『非認知能力 概念・測定と教育の可能性』北大路書房

無藤隆(2016)「第 2 特集インタビュー 生涯の学びを支える『非認知能力』をどう育てるか」

ベネッセ教育総合研究所『これからの幼児教育』p18~21、